

北小松遺跡ほか

——平成19年度発掘調査概報——

序 文

ゆとりと豊かさを目指すことが重要になってきたなかで、地域住民の間では身近な地域の個性豊かな風土や歴史的な文化財の保護・活用の取り組みへの気運が高まっています。

しかし、その一方で道路建設や住宅造成など都市化の波が地方にも押し寄せ、大規模なは場整備などの各種事業も年を追うごとに激化しており、文化財は年々破壊され、消滅の危機にさらされることが多くなってきております。なかでも、土地との結びつきの強い埋蔵文化財は、各種の開発により常に破壊される恐れがあることから、当教育委員会では開発部局等に遺跡の所在を周知徹底するとともに、開発との関わりが生じた場合には重要な文化財を積極的に保護することに努めてきております。

本書は大崎市田尻西部地区におけるは場整備事業に伴う水路と農道建設工事に先立って実施した北小松遺跡・宮沼遺跡・愛宕山遺跡・諏訪遺跡の発掘調査報告書です。

北小松遺跡は縄文時代晚期の遺跡、宮沼遺跡・愛宕山遺跡・諏訪遺跡は古代の遺跡として知られ、今回の調査により遺跡の性格をこれまで以上に解明する上で貴重な成果が得られました。こうした成果が広く県民の皆様や各地の研究者に活用され、地域の歴史解明の一助になれば幸いです。

最後に、遺跡の保護に理解を示され、発掘調査に際して多大なるご協力をいただいた関係機関の方々、さらに実際の調査にあたられた皆様に対して、厚く御礼申し上げる次第です。

平成20年3月

宮城県教育委員会

教育長 佐々木 義 昭

例 言

1. 本書は、大崎地方振興事務所と江合川沿岸土地改良区との協議に基づき実施した、ほ場整備事業（水路・農道建設工事）に伴う北小松遺跡・宮沼遺跡・愛宕山遺跡・諏訪遺跡（以下、北小松遺跡ほかとよぶ）の発掘調査概報である。
2. 調査は宮城県教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課が担当した。
3. 第1図は国土交通省国土地理院発行の「荒谷」「高清水」（1/25000）地形図を複製して利用した。
4. 測量原点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第X系による。
5. 使用した遺構略号は、SD：溝 SK：土坑 SX：竪穴状遺構・焼け面である。
6. 土色の記載にあたっては『新版 標準土色帖 1994年度版』（小山・竹原1994）を使用した。
7. 国版1-1の空中写真是「国土画像情報（昭和50年撮影カラー空中写真：CTO-75-27-C5c-6）（国土交通省）を一部加工して転載した。
8. 本書は、調査を担当した各調査員の協議を経て、資料整理を志間貞治・生田和宏・小野章太郎、写真撮影を小野章太郎が中心となって行い、執筆・編集を生田和宏・西村力が行った。
9. 発掘調査と資料整理・報告書作成にあたり、下記の方々からご指導、ご協力を賜った（敬称略）。
松本秀明（東北学院大学）、須藤隆（東北大名誉教授）、阿子島香・菅野智則・市川健夫（東北大）、小井川和夫・天野順陽（宮城県多賀城跡調査研究所）
10. 本遺跡の調査成果は、現地説明会や宮城県遺跡調査成果発表会などでその内容の一部を公表しているが、これらと本書の内容が異なる場合は、本書がこれらに優先する。
11. 発掘調査の記録や出土品は宮城県教育委員会が保管している。

調 査 要 項

遺跡名：北小松遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号No38005、遺跡略号UO）

愛宕山遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号No38047、遺跡略号RJ）

諏訪遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号No38096、遺跡略号RI）

宮沼遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号No38046、遺跡略号RK）

所在地：大崎市田尻諏訪町ほか

調査原因：経営体育成基盤整備事業田尻西部地区

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

佐久間光平、西村 力、志間貞治、尾形祐之、千葉直樹、生田和宏、小野章太郎、
初鹿野博之

調査期間：平成19年5月21日～11月2日

調査面積：7,961m²（事前調査区：2,469m² 確認調査区：5,492m²）

調査協力：大崎市教育委員会・宮城県大崎地方振興事務所・江合川沿岸土地改良区

目 次

| | |
|--------------------|----|
| 第Ⅰ章 遺跡の環境..... | 1 |
| 第Ⅱ章 調査の概要..... | 1 |
| 1. 調査の方法と経過..... | 1 |
| 2. 地形と層序..... | 3 |
| 3. 発見された遺構と遺物..... | 4 |
| 第Ⅲ章 まとめ..... | 11 |
| 引用・参考文献..... | 12 |
| 写真図版..... | 13 |
| 報告書抄録 | |



A-28区調査風景（北東から）



ハンドオーガーによる地層確認作業



現地説明会の様子

第Ⅰ章 遺跡の環境

北小松遺跡ほかは大崎市田尻諏訪地区とその周辺に所在し、江合川と鳴瀬川の沖積作用で形成された東西約13km、南北約17kmの大崎平野の北寄りに位置する。大崎平野の四周は主に丘陵で、東は広瀬丘陵が南北に、南と北はそれぞれ三本木丘陵と清滝丘陵が西から東へ延びる。遺跡はこの清滝丘陵から樹枝状に派生した低丘陵の縁辺とそれらに囲まれた沖積地にある。遺跡の標高は約17.0～19.0mで、現在は宅地や水田・畑地などとなっている。

大崎市田尻の縄文時代の遺跡として、後期末葉から晩期前葉の貝塚である国史跡中沢貝塚や国指定重要文化財の遮光器土偶が出土した恵比須田遺跡が著名であるが、本遺跡周辺にも縄文時代晩期の遺跡が多く点在する（第1図）。そのうち宮沢遺跡で発見された縄文時代晩期末葉の大型土坑と遺物包含層から出土した多量の遺物は特筆される（宮城県教育委員会1980）。

北小松遺跡は低湿性の遺物包含層・貝層が広がる遺跡として注目されてきた。1953年に発見され、『宮城県史1』の遺跡地名表には縄文時代晩期の大洞BC～A'式土器の出土する遺跡として紹介された（伊東1957）。さらに1957年の開工工事では、「泥炭層」や「貝層」から縄文時代の人骨やシジミ・タニシなどの貝類、多数の縄文土器も発見されている（興野1959）。

第Ⅱ章 調査の概要

1. 調査の方法と経過

田尻西部地区のは場整備事業計画に伴い、平成16年度に宮城県教育委員会、平成17年度に旧田尻町教育委員会によって確認調査が実施された。そして、北小松遺跡の東側丘陵裾部の地表下約2mでは縄文時代晩期の遺物包含層、西側の微高地では古代の遺物が発見された。この確認調査の結果を受け、可能な限りの設計変更を検討した後に、平成19年度から発掘調査が実施されることになった。今回の調査はその1年目にあたり、調査対象区域は、今年度は場整備事業が実施される範囲（約257,000m²）のうち水路予定地（12,800m²：事前対象）と農道予定地（20,900m²：確認対象）である。

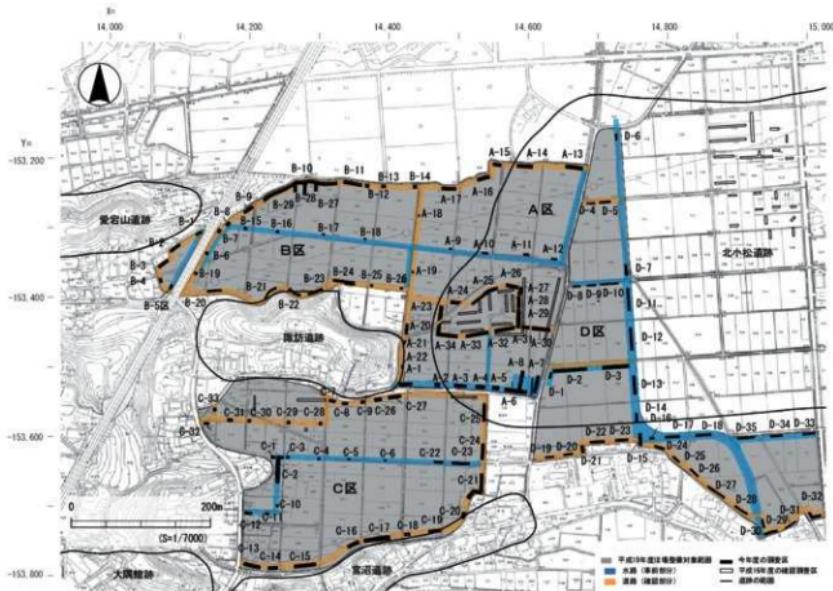
まず、現道や現地形によって調査対象区域を大きくA～D区に4分割した中に、幅2～4.5mの調査区を設定し、平成19年5月21日から発掘調査を開始した。現地形の状況やハンドオーガーを用いたボーリング調査の結果を踏まえ、実際に検出された旧地形や堆積層、遺構・遺物の広がりを勘案しながら、適宜調査区を再設定し、その調査区毎に精査・記録した後、埋め戻しを行った。また9月14日から26日には、今後の暗渠排水工事を考慮し、水田予定区域で遺構の広がりが予想されるB区について追加の確認調査（B-27～29区）もあわせて行った。そして10月2日に花粉分析・珪藻分析用の資料採集を行い、10月6日には現地説明会（参加65名）を開催し、11月2日に調査を終了した。最終的な調査区の総数は131箇所で、各調査区は長さ3～113m、幅2～4.5m、調査深度0.2～3m、全ての調査面積は7,961m²（事前調査：2,469m²、確認調査：5,492m²）となった（第2図）。

なお、調査区や遺構の平面図作成には電子平板を使用し、断面図は1/20で作成した。また写真撮影には、6×7cm判モノクロフィルム・カラーリバーサルフィルム、デジタルカメラを使用した。



| No. | 遺跡名 | 立地 | 種別 | 時代 | No. | 遺跡名 | 立地 | 種別 | 時代 |
|-----|----------|------|----------|---------------|-----|-----------|------|--------|-------------|
| 1 | 北小松遺跡 | 陸+河岸 | 散布地・発掘 | 縄文時代 | 21 | 相賀遺跡 | 丘陵尾根 | 散布地 | 縄文時代・古代 |
| 2 | 宮原遺跡 | 丘陵 | 散布地 | 古代 | 22 | 大須遺跡 | 丘陵 | 散布地 | 縄文前・古代 |
| 3 | 愛宕山遺跡 | 丘陵 | 散布地 | 古代 | 23 | 船ノ木沢田遺跡 | 段丘 | 集落・塚 | 縄文・古代・中世 |
| 4 | 源治遺跡 | 丘陵 | 散布地 | 古代 | 24 | 野川遺跡 | 段丘 | 集落・散布地 | 縄文・古代・中世 |
| 5 | 新田遺跡 | 丘陵 | 古墳・墓葬・集落 | 弥生・古墳・古代・中世 | 25 | 櫛谷沢遺跡 | 段丘 | 集落 | 縄文・古墳・奈良～中世 |
| 6 | 新江川遺跡 | 丘陵 | 散布地 | 縄文時代 | 26 | 寄り毛戻前遺跡 | 段丘 | 集落 | 縄文・古代・中世・近世 |
| 7 | 国史跡 宮沢遺跡 | 丘陵 | 官衙 | 縄文時代・弥生・奈良・平安 | 27 | 中ノ茶道跡 | 段丘 | 集落 | 縄文・古代・中世・近世 |
| 8 | いのり塚周辺遺跡 | 丘陵裏 | 散布地 | 縄文時代 | 28 | 覚夢寺遺跡 | 段丘 | 古墳・散布地 | 縄文・古代・中世・近世 |
| 9 | 長者原D遺跡 | 丘陵斜面 | 散布地 | 縄文 | 29 | 北山六郷遺跡 | 段丘 | 集落地 | 縄文・古代・中世・近世 |
| 10 | 上野川遺跡 | 丘陵斜面 | 散布地 | 縄文 | 30 | 北山八道跡 | 段丘 | 散布地 | 縄文・古代・中世・近世 |
| 11 | 嵐山遺跡 | 丘陵 | 散布地 | 縄文 | 31 | 伏元遺跡 | 丘陵 | 散布地 | 縄文・古代 |
| 12 | 長者原八道跡 | 丘陵 | 散布地 | 縄文時代・奈良 | 32 | 諏訪神社遺跡 | 丘陵 | 散布地 | 縄文・古代 |
| 13 | 長者原B遺跡 | 丘陵斜面 | 散布地 | 縄文 | 33 | 四ノ塚原遺跡 | 丘陵 | 散布地 | 縄文・古代 |
| 14 | 長治遺跡 | 丘陵 | 散布地 | 縄文 | 34 | 丸引堂遺跡 | 丘陵斜面 | 集落 | 縄文・奈良・平安 |
| 15 | 化女沼遺跡 | 丘陵斜面 | 散布地 | 縄文 | 35 | 国中野・木戸丸遺跡 | 丘陵 | 史跡 | 奈良 |
| 16 | 馬場遺跡 | 沖砂平野 | 散布地 | 縄文・古代 | 36 | 足立橋頭遺跡 | 丘陵斜面 | 散布地 | 縄文・古代 |
| 17 | 十八小川遺跡 | 丘陵裏 | 散布地 | 縄文・古代 | 37 | お城子山遺跡 | 自然堤防 | 散布地 | 縄文時代・古墳前・古代 |
| 18 | 梅ヶ丘遺跡 | 丘陵斜面 | 散布地 | 縄文・古代 | 38 | 御所小学校西遺跡 | 自然堤防 | 散布地 | 縄文時代 |
| 19 | 萩田遺跡 | 段丘 | 集落 | 縄文時代・弥生・古代～近世 | 39 | 猿子山西遺跡 | 自然堤防 | 散布地 | 縄文時代 |
| 20 | 半島遺跡 | 丘陵斜面 | 散布地 | 縄文時代 | | | | | |

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡



第2図 調査区配置図

2. 地形と層序

(1) 地形の現況

調査区域の現況は、低丘陵で囲まれた標高16.5～18.5mのほぼ平坦な水田地帯であり、概ね丘陵裾部～沖積低地部によって構成される。沖積低地部へ延びる低丘陵の一部は、過去の開田や近年の水田整備によって大きく削平されている。

(2) 層序

丘陵裾部と沖積低地部では層序に違いがあるが、堆積状況が良好な沖積低地部では表土から地山岩盤まで、10層に大別できた（第3図）。

第Ⅰ層：表土層。厚さ30～40cm。

第Ⅱ層：スクモ層。厚さ2～50cm。A～D区の沖積低地部に分布。

第Ⅲ層：灰白色火山灰層（十和田a火山灰（To-a））。最も厚い地点で厚さ10cm。A～D区の沖積低地部に分布。

第Ⅳ層：スクモ層。最も厚い地点で厚さ1m以上。A～D区の沖積低地部に分布。古代。

第V層：黄褐色粘土・シルト～砂層。厚さ2～3m以上。水成堆積（洪水由来か）。

第VI層：黒色粘土層～砂層。沖積低地部では数層に細分され、いわゆる「泥炭層」もこれらに含まれる。厚さ10～30cm。遺物包含層。縄文晩期。

第Ⅷ層：黒色粘土層。

第Ⅸ層：暗褐色砂層。

第Ⅹ層：黄褐色粘土～シルト層。

第Ⅺ層：凝灰岩層。基盤層。

縄文時代晩期の遺構は第VI層または第IX層を掘り込んで形成されている。ほとんどの遺物は第VI層から出土している。

(3) 第VI層の分布と深度

第VI層は地表下約0.3～3.4mの標高約14～18mで検出された（第4図）。第VI層が検出された標高値をみると、15～17mの等高線は現地形の西から東へ張り出す4つの低丘陵の裾部を巡るように配されている。したがって、第VI層は現在の丘陵部から沖積低地部へ向かって次第に深くなるとみられる。また、諏訪遺跡が所在する低丘陵の北・東・南斜面の裾部では、15・17mの等高線がすぐ東の微高地まで巡る。よってこの微高地は本来、東の低丘陵からやせ尾根状に派生した丘陵の一部と考えられる。

なお、第VI層が検出できた調査区の多くは丘陵斜面や裾部である。A～C区の沖積低地部の調査区では、さらに調査深度が深くなるので、多くは第IV・V層の検出で留めているが、D区での標高値はすべて約15mであることから、沖積低地部の第IV・V層の下層には第VI層がほぼ平坦に広がっていることが予想される。

以上の検討から、現地形の低丘陵の斜面や裾部は縄文時代晩期にも低丘陵の斜面や裾部にあたることと、現地形の沖積低地部の下には縄文時代晩期の第VI層がほぼ平坦に広がっていると考えられた。よって第II～V層の堆積状況を勘案して地形の変遷を推測すると、縄文時代晩期には現沖積低地部の下の標高約15mの位置に沼地が広がり（第VI層）、その後に河川によって運ばれた土砂が厚く堆積して一部に微高地が形成され（第V層）、古代以降に湿地帯（第II～IV層）になったと考えられる。

3. 発見された遺構と遺物

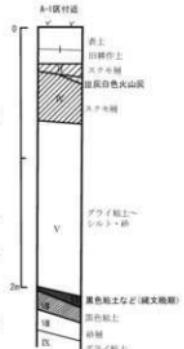
縄文時代晩期と近世から現代とみられる遺構が検出された。縄文時代晩期の遺構には、A区の竪穴状遺構1基・土坑4基・焼面5箇所・ピット数基、B区の土坑2基がある。近世以降の遺構にはA区の溝4条・土坑1基、D区の溝1条がある。以下、主要な遺構と遺物について述べる。

(1) 遺構

A区（図版2-1～3-4）

調査対象範囲の中央部で、中央部の沖積低地部と諏訪遺跡の所在する低丘陵の東裾部で構成される。中央部の水田面より1～1.5mほど高い微高地は、本来、諏訪遺跡が所在する低丘陵から派生したものとみられる。A-1～34区まで34箇所の調査区を設け、A-1～12区は事前調査、A-13～34区は確認調査を行った。

第VI層はA-1・20～26・28～31・33・34区で確認した。諏訪遺跡が所在する丘陵の東裾部（A-1・20・21区）、微高地の北斜面（A-23・24・25区）・東斜面（A-28・29区）・南斜面（A-34区）



第3図 沖積低地部の層序

では、丘陵や微高地の斜面に堆積した第VI層の傾斜に沿って縄文時代晚期の遺物が分布しており、特に丘陵と微高地の突端付近の裾部にあたるA-25・26・28~31区では大量に出土した。またA-25区では縄文土器や種子などが廃棄された状況がみられた。

縄文時代晚期の遺構には竪穴状遺構1基 (SX04)・土坑4基 (SK03・05~07)・焼面5箇所 (SX01・02・08・09・12) と少数のピットがあり、多くはA-29区で検出された(第5図)。SX04は径約2.5mの円形で、深さ約0.2mある。底面は平坦で壁面はほぼ垂直に立ち上がる。床面からは大洞C₂式の深鉢や浅鉢(図版8-5)などが出土した。土坑はA-29区の北部から中央部に集中する。規模が最大のSK03は径約2m、深さ約0.5mで底面は平坦、壁面はややオーバーハングしている。堆積土から縄文土器の破片が少数出土した。なお、近世から現代とみられる遺構には溝4条 (SD1001~1004)・土坑1基 (SK1006) があり、A区中央部から南部のA-6・8・29・30・32区で検出された。

B区(図版3-5~4-6)

調査対象範囲の北西部で、中央部の沖積低地部と愛宕山遺跡から派生する東西にのびる低丘陵と微高地の裾部、諏訪遺跡の所在する低丘陵の北裾部から構成される。B-1~26区まで26箇所の調査区を設け、B-1~14区、B-19~29区は確認調査、B-15~18区は事前調査を行った。

第VI層はB-1~4・7~11・13・20~24・28区で確認した。愛宕山遺跡が所在する丘陵突端の東・南裾部(B-10・11・27~29区)と、諏訪遺跡が所在する丘陵の北裾部(B-20~24区)では、丘陵や微高地の斜面に堆積した第VI層の傾斜に沿って縄文時代晚期の遺物が分布しており、特に丘陵の突端付近の裾部にあたるB-10・11・27~29区では大量に出土した。

縄文時代晚期の遺構にはB-10区東部で検出された土坑2基 (SK10・11) がある(第5図)。SK10は径約1.3mの円形で、断面形はフラスコ状を呈している。堆積土中位から大洞A式の四脚付鉢(図版8-1)、鉢(図版7-5)などが一括して廃棄された状況がみられた。

C区(図版5-1~5-4)

調査対象範囲の南西部で、中央部の沖積低地部と諏訪遺跡の所在する小丘陵の南裾部、宮沼遺跡の所在する低丘陵の北裾部、2つの低丘陵の間にあたる低丘陵の北・南・東裾部から構成される。C-1~33区まで33箇所の調査区を設け、C-7~9区、C-13~21区、C-24~33区は確認調査、C-1~6区、C-10~12区、C-22~23区は事前調査を行った。遺構は検出されなかった。

第VI層はC-1・2・7・8・12~15・17・19~21・26・27・31~33区で確認した。諏訪遺跡が所在する丘陵の南裾部(C-7・26・27区)と、宮沼遺跡が所在する丘陵の北裾部(C-13~15・17・19~21区)、その間にあたる小丘陵の東裾部(C-1・2)では、丘陵や微高地の斜面に堆積した第VI層の傾斜に沿って縄文時代晚期の遺物が、第IV層の傾斜に沿って古代の遺物が分布していた。特に丘陵の突端付近の裾部にあたるC-1・2・21区では縄文時代晚期の遺物が大量に出土した。

D区(図版5-5~5-6)

調査対象範囲の東部で沖積低地となっている。南辺には自然堤防の微高地が東西にのびる。東西にD-1~35区まで35箇所の調査区を設け、D-4・5区、D-19~32区は確認調査、D-1~3区、D-6~18区、D-33~35区は事前調査を行った。

第VI層はD-7・11・13~19・21・22・24・26~28・32区で確認した。遺物はD-12区のみ出土した。遺構は近世以降の溝1条(SD1005)を検出した。

(2) 遺物

縄文時代の土器・土製品・石器・石製品・自然遺物が整理用平箱で44箱、古代の土師器・須恵器・瓦などが整理用平箱で1箱出土した。自然木は認められたが木製品は出土しなかった。

縄文時代

【縄文土器】(図版6-1~9-2)

A~C区の丘陵や微高地の突端付近で、その裾部と斜面に堆積した第VI層から出土したものがほとんどのである。深鉢(図版6-2・3、7-1・2)・四脚付鉢(図版8-1)・鉢(図版7-3・5、8-2)・浅鉢(図版8-5)・皿・台付鉢(図版7-4・5)・壺(図版8-3・4)・蓋(図版9-1)などがある。時期幅は縄文時代前期と縄文時代晚期~弥生時代前期を確認した。ほとんどが大洞A~A'式で、縄文時代前期、大洞BC~C₂式、弥生時代前期はわずかである。なおC-1・2区は、大洞C₁・C₂式が主体で、他の地区より深鉢などの粗製品の割合が高いことが指摘できる。

深鉢には大型品と小型品があり、大型品の粗製深鉢には多量の炭化物が付着したものも比較的多くある。また四脚付鉢・鉢・浅鉢・台付鉢の口縁や壺の肩部にはいわゆる工字文・変形工字文・匝字文などの文様が多くみられる。なお、鉢・浅鉢・台付鉢・壺などの精製品には黒漆や赤漆が塗られたものも比較的多くあるほか、漆容器と考えられる土器もみられる(図版9-2)。

【土製品】(図版9-3~5)

スプーン形土製品(図版9-3)・装身具(図版9-4)・土偶(図版9-5)などがある。装身具と推測される土製品は中央に穿孔がある。土偶は脚部と頭部の破片である。

【石器】(図版10-1・2)

A区中央の微高地裾部とB区の愛宕山遺跡の所在する丘陵の突端付近の裾部を中心に出土した。地区による器種組成や石材などの違いはみられない。主な器種として、石鎚、石錐、石匙、石簾、石斧、礫石器などがある(図版10-1)。礫石器類には凹石、砥石、磨石、石皿がみられる(図版10-2)。石鎚や石錐、石匙などの定形的な石器では、いずれも出土した点数は少ないが、それぞれ基本的な類型が揃っている。一方で、石鎚の未製品と推定されるものが一定量存在しており、隣接する丘陵上で石鎚が製作されていた可能性がある。礫石器類は破片資料が多いものの、剥片素材のトゥールに比べて多く出土している。石材は、珪質頁岩や凝灰岩、碧玉が多用される傾向がみられる。

【石製品】(図版10-3)

石刀や石棒の破片、円盤状石製品がわずかに出土している。

【自然遺物】

自然木のほか、クルミ・ドングリ・トチ・ニワトコなどの種実や種子、シカやイノシシなどの四肢骨片や歯などが出土している。

古代

土師器の壺・甕、須恵器の壺・甕、平瓦・灰釉陶器の破片などが出土している(図版10-4)。

第Ⅲ章　まとめ

今回の調査では、愛宕山遺跡・諏訪遺跡・宮沼遺跡が所在する低丘陵とそれから派生する微高地の裾部と斜面から、縄文時代晚期の堅穴状遺構1基、土坑6基、焼面5箇所、ビット数基と遺物包含層を発見した。そして大洞A～A'式を主体とする土器類、土偶などの土製品、石錐・石錐・磨石などの石器類、石刀などの石製品類、自然木・種子や種実・獸骨などが出土した。近世以降の遺構は溝5条・土坑1基のみで、古代の遺物は土器類と瓦の破片が少量出土したのみであった。遺跡は第6図の赤線のように広がることが予想される。

北小松遺跡ほかは大崎平野の北辺部にあり、周辺の地形は複雑に開拓された低丘陵とそれに囲まれる沖積低地から構成されるが、今回の調査と平成16年度調査により、この現地形の起伏は縄文時代晚期の地形の起伏をおおよそ反映したものであり、現在の沖積低地の位置には縄文時代晚期には沼地が広がっていたと考えられる。

さらにこの沼地の縁辺で、低丘陵の斜面から裾部にあたる場所から、低湿性の遺物包含層が近接し合う多くの地点で検出され、それが沼地へ向かって潜っていくようにして広がることが明らかとなった。それらの遺物は、低丘陵や微高地の斜面の傾斜に沿って分布しており、多くはその上にある低丘陵や微高地から流入してきたものとみられるが、縄文土器や種子がまとまって出土したA-25区東部や、B-10区のSK10は、近接した居住域からの捨て場であったと考えられる。

このような遺物包含層の分布や遺物の出土状況は、沼地を囲むように広がる低丘陵や微高地に、特にその突端周辺に、集落が営まれていた可能性が高いことを示している。そのうち、突端付近に遺物の出土量が多いという状況は、突端付近の集落が他の場所の集落よりも大きかったという集落の規模の大小や、一つの集落内において突端付近が違う使われ方をされていたという集落内の場の性格の違いなどを反映している可能性がある。また遺物包含層の出土遺物は、どの地点も大洞A～A'式が主体であるので、これらの集落は縄文時代晚期終末期というほぼ同時期に最盛期を迎えていたと考えられる。ただしC-1・2区は大洞C₁・C₂式が主体となるので、今後各地点の詳細な存続時期や画期は、場所によって多少異なっていたことを視野に入れておく必要がある。

このように、沼地を囲むようにして広がる低丘陵上や微高地に近接して多くの集落が営まれ、それらが縄文時代晚期終末期というほぼ同時期に存在していた事例は、ごく稀で貴重である。そしてこの沼地の北から東側縁辺にはさらに同様の遺跡群が存在することが、確認調査によって明らかにされており、次年度以降はこれらの調査が計画されている。今後は、遺物包含層や遺構の時期と分布、出土遺物の量・組成などを分析し、総合的に検討することで、具体的な集落内の場の性格、個々の集落の構成や機能、集落間の関係、集落群の広がり、そしてそれらの変遷などを明らかにすることに努めたい。

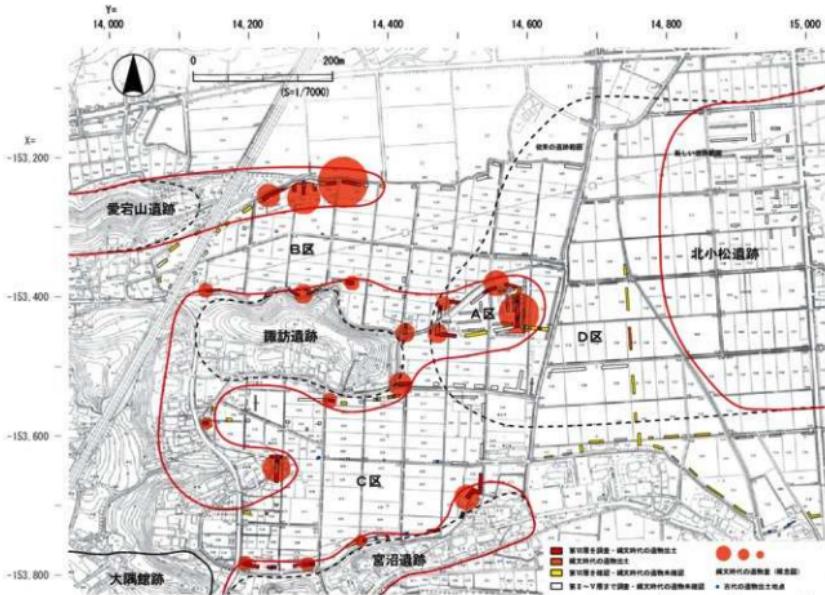
引用文献

伊東信雄 1957 「古代史」『宮城県史』

興野義一 1959 「江合川流域の石器時代文化」『仙台郷土研究』19-3

宮城県教育委員会 1980 「宮沢遺跡」『東北自動車道道路調査報告書Ⅲ』宮城県文化財調査報告書第69集

宮城県教育委員会 2005 「北小松遺跡」『塙の越遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第202集



第6図 遺跡の範囲と構造・遺物の分布



1. 北小松遺跡ほかの位置（上が北）

国土交通省：国土地理情報 緯度：約 36°10'N
(昭和50年撮影カラーフィルム写真、整理番号：CTO-75-27-C5c-6)



2. 遺跡遠景（南東から）



1. A-28・29区全景（南東から）



2. A-29区SK03土坑・SX04竪穴状遺構ほか（南東から）

図版2



1. A-28区VI層出土自然木（北東から）



2. A-28区SX01焼面（東から）



3. A-25区全景（北東から）



4. A-25区VI層種子出土状況



5. B-22区全景（西から）



6. B-22区V層土器出土状況

図版3



1. B-10区東部全景（東から）



2. B-10区東部深掘区VI層遺物出土状況（南から）



3. B-10区東部SK10土坑遺物出土状況（北東から）



4. B-10区東部SK10土坑完掘状況（南西から）



5. B-28区南部全景（北東から）



6. B-28区VI層遺物出土状況（南東から）

図版4



1. C-2区全景（北東から）



2. C-2区南部VI層遺物出土状況（北東から）



3. C-21区全景（北東から）



4. C-20区全景（南西から）



5. D-15区深堀区全景（北東から）



6. D-2区SD1005検出状況（西から）



1. 繩文土器



2. 深鉢



3. 深鉢

図版6 繩文土器(1)



1. 深鉢



2. 深鉢



3. 鉢



4. 台付浅鉢



5. 鉢



6. 台付鉢



1. 四脚付鉢



2. 鉢



3. 壺



4. 壺



5. 浅鉢

図版8 繩文土器(3)



1. 蓋



2. 漆付着土器



3. スプーン形土製品



4. 装身具



5. 土偶（頭部および脚部）

図版9 繩文土器(4)・土製品



1. 石鎌、石錐、石匙、石斧、石箇、石斧など



2. 凹石、砥石、磨石、石皿など

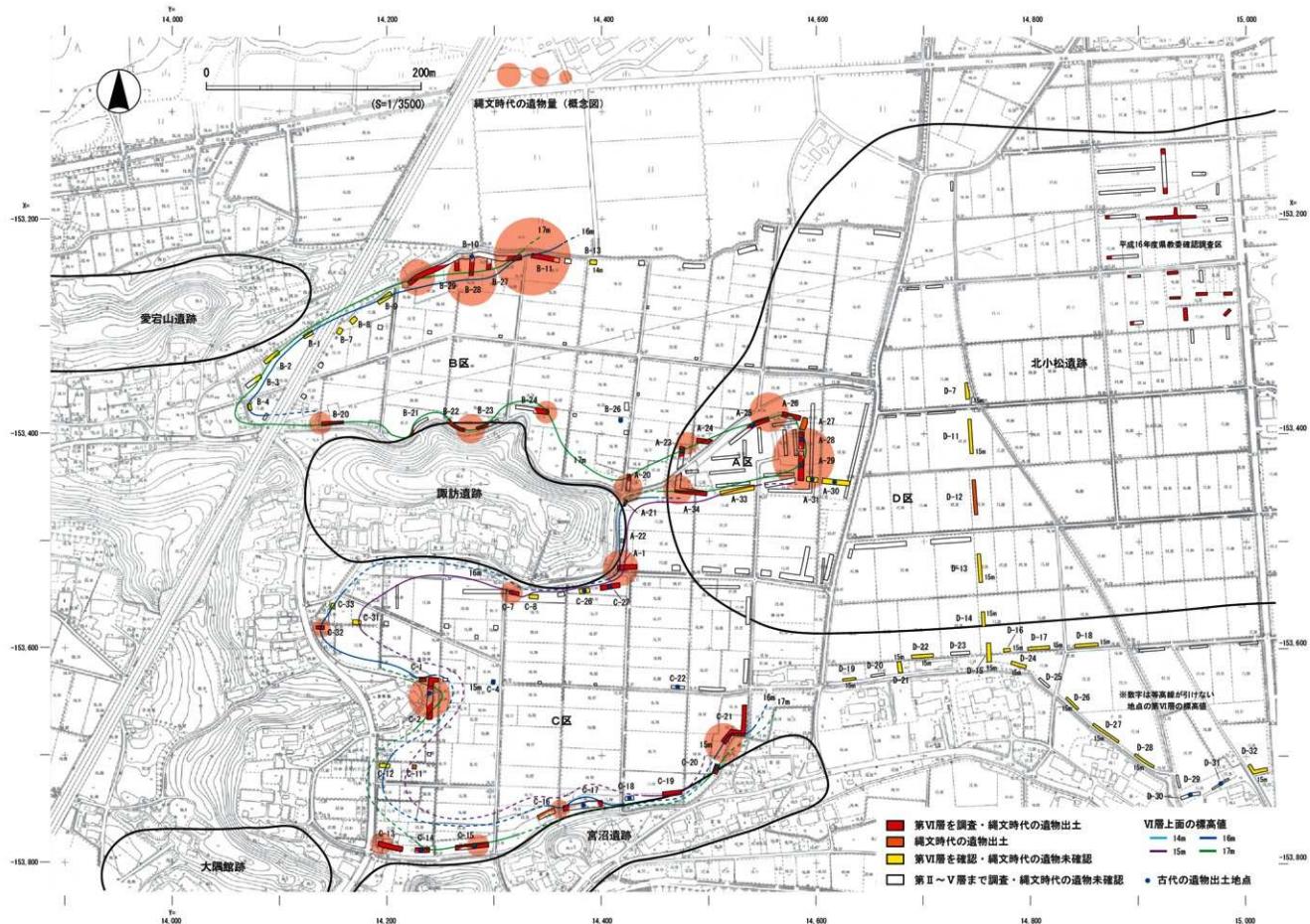


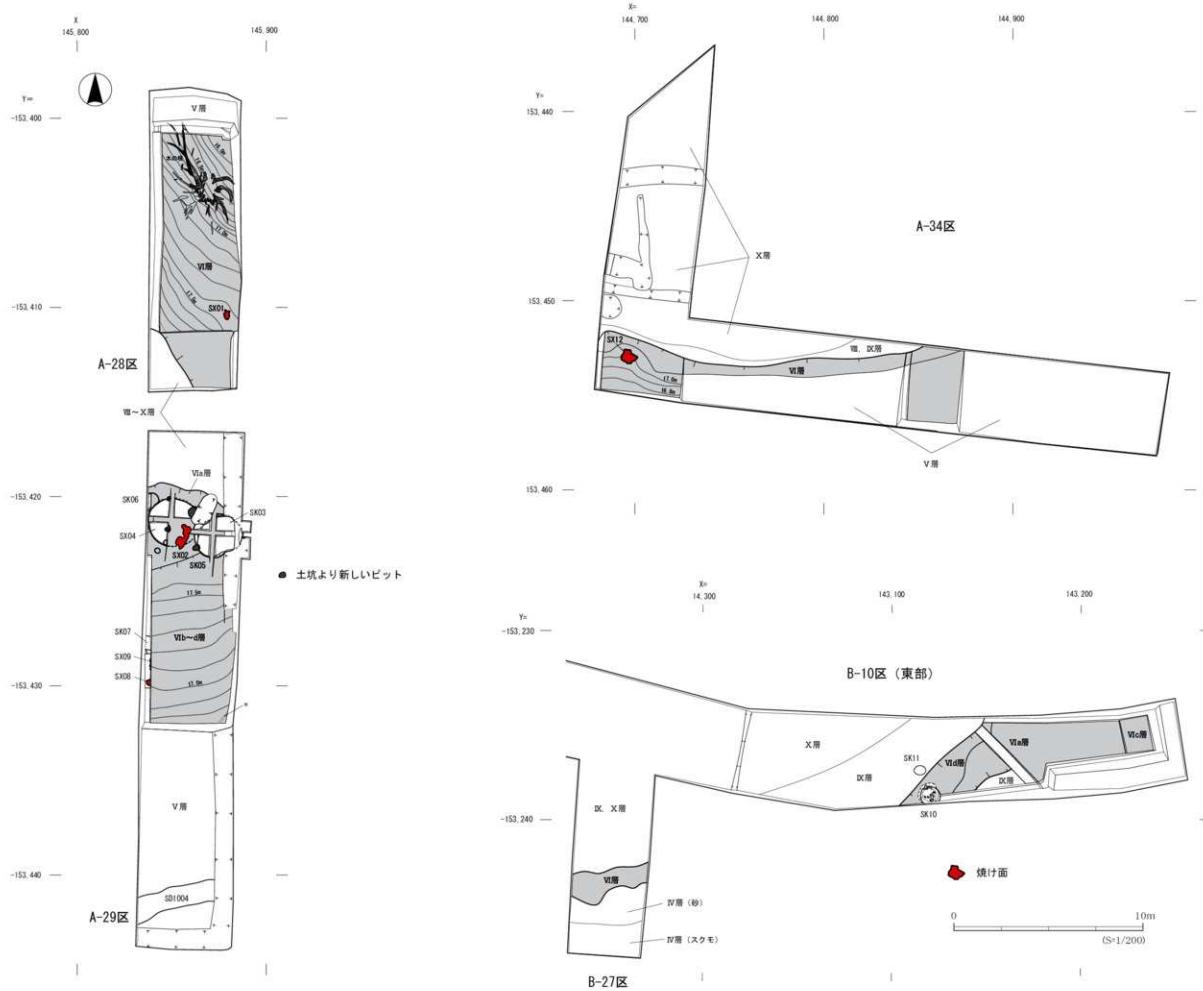
3. 石刀、円盤状石製品など



4. 土師器杯・甕、須恵器杯、灰釉陶器、平瓦

図版10 石器・石製品・古代の遺物





第5図 主要構造が検出された調査区

報告書抄録

| ふりがな | きたこまついせきほか | | | | | |
|---------------|--|-------------|---------------------------|--|---------------------|--------|
| 書名 | 北小松遺跡ほか | | | | | |
| 副書名 | 平成19年度発掘調査概報 | | | | | |
| 卷次 | | | | | | |
| シリーズ名 | 宮城県文化財調査報告書 | | | | | |
| シリーズ番号 | 第216集 | | | | | |
| 編著者名 | 生田和宏・西村力 | | | | | |
| 編集機関 | 宮城県教育委員会 | | | | | |
| 所在地 | 〒980-8423 宮城県仙台市青葉区本町三丁目8-1 TEL 022-211-3682 | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦2008年3月25日 | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード | 世界測地系 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
| | 市町村 | 道路番号 | 北緯 東経 | | | |
| 北小松遺跡 | 大崎市田尻小松字屋敷裏 | 42153 38005 | 38° 37' 00" 00° 30" | | | |
| 愛宕山遺跡 | 大崎市田尻諏訪峠字諏訪 | 42153 38047 | 38° 37' 59" 9° 42" | 2007.5.21 ~11.2 | 7,961m ² | は場整備事業 |
| 諏訪遺跡 | 大崎市田尻諏訪峠字諏訪 | 42153 38096 | 38° 37' 3" 0° 49" | | | |
| 宮沼遺跡 | 大崎市田尻諏訪峠字宮沼 | 42153 38046 | 38° 36' 51" 0° 59' 52" | | | |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 | |
| 北小松遺跡 | 散布地(泥炭層) | 縄文時代晩期 | 竪穴状遺構・溝・ 土坑・焼面 | 縄文土器・土製品・ 石器・石製品・ 自然遺物・土師器・ 須恵器・瓦 | | |
| 愛宕山遺跡 | | | | | | |
| 諏訪遺跡 | | | | | | |
| 宮沼遺跡 | | | | | | |
| 要約 | <p>愛宕山遺跡・諏訪遺跡・宮沼遺跡が所在する低丘陵とそれから派生する微高地の裾部と斜面から、縄文時代晩期の竪穴状遺構1基、土坑6基、焼面5箇所、ピット数基と遺物包含層を発見した。そして大洞A～A'式を主体とする土器類、土偶などの土製品、石器・石錐・石錐・磨石などの石器類、石刀などの石製品類、自然木・種子や種実・歯骨などが出土した。近世以降の遺構は溝5条・土坑1基のみで、古代の遺物は土器類と瓦の破片が少量出土したのみであった。</p> <p>北小松遺跡ほかの周辺の地形は、複雑に開折された低丘陵とそれに開まれる沖積低地から構成されるが、この沖積低地の位置には縄文時代晩期には沼地が広がっていたと考えられた。そして沼地の縁辺で、特に低丘陵尖端でその斜面から裾部にあたる場所では、低湿度の遺物包含層が近接して多くの地点で検出された。この遺物包含層は沼地へ向かって潜っていくようにして広がっている。遺物包含層の出土遺物の多くは、すぐ上にある低丘陵や微高地から流入してきたものとみられるが、近接した居住域からの捨て場のものと考えられるものもある。</p> <p>このように沼地を開拓するとして広がる低丘陵上や微高地上に、近接して多くの集落が営まれ、それらが縄文時代晩期終末期といふほん時期に存在していた事例は、ごく稀で貴重である。なお、この沼地の北から東側縁辺には、さらに同様の遺跡群が存在することが、確認調査によって明らかにされており、次年度以降も引き継ぎこれらの調査が計画されている。</p> | | | | | |

宮城県文化財調査報告書第216集

北小松遺跡ほか

平成20年3月21日印刷

平成20年3月25日発行

発行 宮城県教育委員会

仙台市青葉区本町三丁目8番1号

印刷 株式会社 東北プリント

仙台市青葉区立町24-24
